

On the Students' Basic Knowledge of Music in Our School : Based on the Second Survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊坪, 千恵, 小佐野, 実穂, 北谷, 久美子, 櫻井, 佐多子, 古市, ゆり子, 高牧, 恵里 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/657

本学学生の音楽の基礎知識について

—第2回目の調査による—

On the Students' Basic Knowledge of Music in Our School :
Based on the Second Survey

伊 坪 千 恵^{*}

ITSUBO Chie

北 谷 久美子^{*}

KITATANI Kumiko

古 市 ゆり子^{*}

FURUICHI Yuriko

小佐野 実 穂^{*}

OSANO Miho

櫻 井 佐多子^{*}

SAKURAI Satako

高 牧 恵 里[†]

TAKAMAKI Eri

はじめに

本学科は、長年において保育士、幼稚園教諭、そして小学校教諭の免許を取得する学生を養成し、社会に送り出してきた。本年度に入学した学生が、保育園や幼稚園、さらに小・中・高でこれまで受けてきた歌唱教育や楽器に触れる音楽教育の中で、音楽の基礎をどの程度理解しているかを調査し、今後の教育現場にどのように生かすことができるかを検証したい。

1. 研究の目的

本研究は、入学した学生の音楽基礎知識を調査、分析し、今後の指導に関する課題を検証することを目的とする。

2. 研究の対象と方法

本学科1年の教科としての科目である「音楽基礎」の授業の中で、音楽の基礎的な知識についての理解度を調査するために、履修者全員にアンケートを実施し、調査結果を分析する。アンケートは、授業を開始する4月と授業受講後、およそ1ヶ月後の6月初旬の2回実施し、音楽通論やピアノ実技の授業を受講した結果、どれだけ理解しているかを検証したい。本稿においては、第1回目のアンケート調査の分析結果を基に、第2回目のアンケート調査を分析し、第1回目との比較検証を行い、今後の課題を検証する。

^{*} 武蔵野大学教育学部兼任講師 [†] 武蔵野大学教育学部

3. 「音楽基礎」の授業でとったアンケート調査について

児童教育1年166名を対象に、次の内容について、アンケート調査を実施した。

(表1)

日 時	アンケート内容
5月30日	①音部記号の名称と表記について ②五線上の音の名称について
6月6日	③音符、休符の名称について ④音符、休符の長さについて

(高牧 恵里)

4. アンケート調査の結果について

【1】記号の名称の認識について (分析：小佐野実穂)

表2と表3、表4と表5を比較することにより、記号の名称と五線上表記への理解は、音楽理論や鍵盤楽器基礎の授業によって成果が明らかに上がったことがうかがえる。

(表2) 《第1回目 2017.4.25実施》

(名)

○ト音記号	△とおんきごう	×トーン記号、不明
85% (141/166)	1% (2/166)	14% (23/166)
○ヘ音記号	△へおんきごう	×不明
80% (133/166)	1% (2/166)	19% (31/166)

(表3) 《第2回目 2017.5.30実施》

(名)

○ト音記号	△とおんきごう	×トーン記号、不明
97% (155/160)	0% (0/160)	3% (6/160)
○ヘ音記号	△へおんきごう	×不明
97% (156/160)	0% (0/160)	3% (5/160)

(表4) 《第1回目 2017.4.25実施》

(名)

◎印刷楽譜どおりの 	○第2線が1点ト音	×位置やサイズが異なる・不明
18% (30/166)	28% (46/166)	54% (90/166)
◎印刷楽譜どおりの 	○第4線がヘ音	×位置やサイズが異なる・不明
26% (43/166)	17% (28/166)	57% (95/166)

(表5) 《第2回目 2017.5.30実施》

(名)

◎印刷楽譜どおりの 	○第2線が1点ト音	×位置やサイズが異なる・不明
41% (65/160)	42% (67/160)	2% (28/160)
◎印刷楽譜どおりの 	○第4線がヘ音	×位置やサイズが異なる・不明
58% (93/160)	17% (39/160)	17% (28/160)

第2回目のアンケートでは、設問を新たに加え、それぞれの記号の意味を自由に記入させたが、これは読み方や型だけでなく真に理解しているかどうかを確認するための設問であった。教員から学生への声がけとして、「幼児や児童に説明する時にどのように答えるか」また、「どのように自分が認識し活用しているか」等とした。

【2】音名の理解について（第2回目の調査結果）（分析：北谷 久美子・伊坪 千恵）

対象者：160名 調査日：2017年5月30日（「音楽基礎」7回目授業）

第2回目の問題も第1回目と同じ問題を出題し、音名の理解について分析した。

（1）－Ⅰ ト音記号の音を読む

（表6）（全問正解者：94.2％・全問不正解者：0％）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
100%	100%	100%	100%	97.4%	99.4%	98.7%	100%	96.8%	100%

（1）－Ⅱ ト音記号の音を弾く

（表7）（全問正解者：92.9％・全問不正解者：1.94％）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
94.8%	94.1%	94.1%	95.4%	91.6%	92.3%	92.3%	93.5%	92.3%	97.4%

（1）－Ⅲ ト音記号の音を五線譜に書く

（表8）（全問正解者：64.2％・全問不正解者：3.8％）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
○	76.3%	76.9%	76.9%	76.3%	76.9%	75.6%	75.6%	75.0%	75.6%
△	23.8%	23.1%	23.1%	23.8%	23.1%	23.8%	23.1%	23.8%	23.8%
×	0%	0%	0%	0%	0%	0.6%	1.3%	1.3%	0.6%

○全て正解 △場所は正解だが音符が不正解 ×場所がわからない

- ・Ⅰの問題では個別の正解率は前回と比べ、全体として5%上昇してほぼ97%以上の正解率となった。使用頻度の高い6つの音は100%の正解率であった。
- ・Ⅱは、前回と比べ10%前後上昇して90%以上の正解率を示した。
- ・Ⅲは、前回に比べ10%以上上昇して75%以上の正解率となった。音高は正解している符尾（ぼう）の無い符頭（たま）の△の回答も正解と見なすと、ほぼ100%に近い正解率となっている。
- ・オクターブの上下の間違いが若干あるものの、ト音記号の音はほぼ全員が理解したと見なすことができる。

（2）－Ⅰ ヘ音記号の音を読む

（表9）（全問正解者：85.3％・全問不正解者：2.6％）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
95.5%	94.9%	96.2%	95.5%	91.7%	94.9%	94.2%	95.5%	94.9%	93.6%

(2)－Ⅱ ヘ音記号の音を弾く

(表10) (全問正解者：66.0%・全問不正解者：3.8%)

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
91.0%	91.0%	91.7%	87.1%	85.5%	82.7%	88.5%	89.1%	86.5%	88.5%

(2)－Ⅲ ヘ音記号の音を五線譜に書く

(表11) (全問正解者：67.9%・全問不正解者：3.8%)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
○	74.8%	74.8%	74.8%	74.8%	74.2%	75.5%	74.2%	74.8%	74.8%
△	20.1%	20.1%	20.1%	20.1%	20.1%	18.9%	19.5%	18.2%	19.5%
×	5.0%	5.0%	5.0%	5.0%	5.0%	5.7%	6.3%	6.9%	5.7%

○全て正解 △場所は正解だが音符が不正解 ×場所がわからない

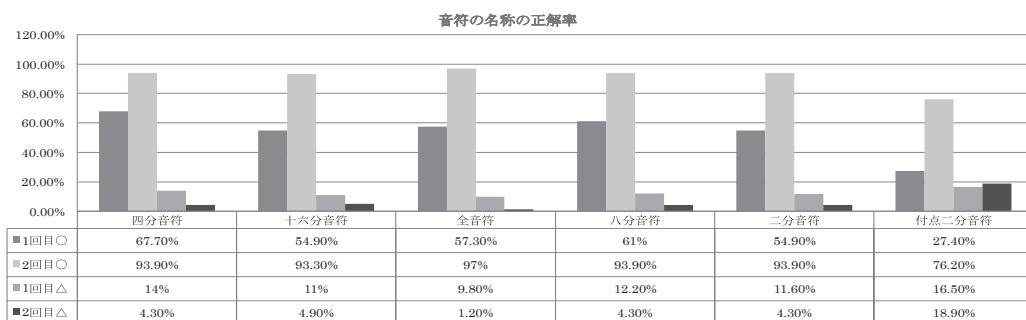
- ・(2)－Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの問題は、前回と比べ個別の正解率はほぼ30%以上の高い上昇率を示した。(前述のとおり(2)－Ⅲの△は正解とみなす)
- ・(2)－Ⅱは、オクターブを間違えて弾くケースがかなりあるものの、全体としてはヘ音記号の音は90%以上の高い上昇を示した。ただし、ヘ音記号の音が全く理解できていない学生が数名いることは留意すべきである。

【3】音符と休符の名称の認識について No.2 (分析：櫻井佐多子)

対象者:164名 調査日：2017年6月6日(「音楽基礎」8回目授業)

(1) 音符の名称について 一回目と同様に正しく書けているものを○、数字は合っているが他の部分が間違っているものを△、全く書けていないものは×として統計を取りグラフにした。

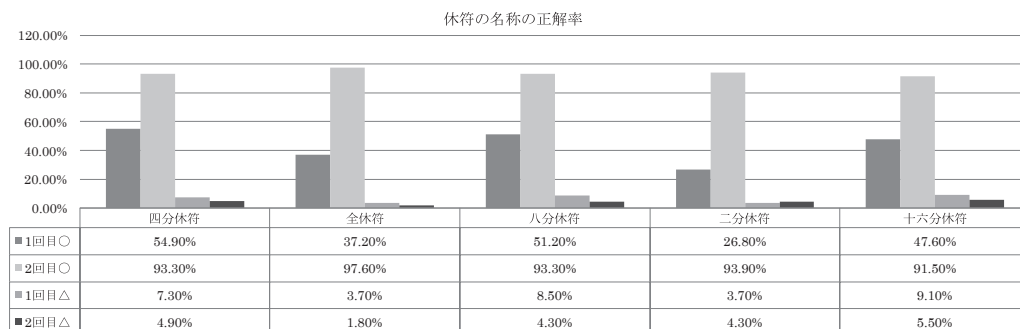
(図1)



初回では最も正解された四分音符でさえ7割を割ったが、二回目では四分音符だけではなく、他の音符もほぼ9割を超え、この一か月余りの成長は著しい。しかし、漢字の誤りはまだあり、その意味を理解すれば間違いはさらに減るであろう。

(2) 休符の名称について ○△×は音符に準じる。

(図2)



第2回目調査では音符とほぼ変わらない正解率が出た。音符同様に休符においてもこの1か月余りの成長は著しい。

(3)－Ⅰ 第2回目調査では五線上に音（休）符が正しく書けるか調査した。音符においては五線の第二線に書くように指示し、正しいものを○、形は良いが場所が間違っているものを△、間違っているものを×とした。また黒い音符を塗っていないものは×、付点は音符の右側なら○とした。

(表12)

音 符	○	△	×
十六分音符	57.3%	27.4%	15.2%
全音符	55.5%	36%	8.5%
四分音符	56.1%	31.7%	12.2%
二分音符	53%	31.1%	15.9%
八分音符	54.3%	32.3%	13.4%
付点二分音符	51.2%	26.8%	22%

付点が音符の左側や棒の横に書かれたものがあり、それは当然×であるが、第二線の音符は棒が上向きになるので符頭の右側から書かれるはずだが、符頭の中央から書かれたものがあり、これは一応○とした。形が良いものに限定すれば正解は8割を超える。

(3)－Ⅱ 休符においては、二分、全休符は正解のみ○、その他は×。他の休符は形も位置も良ければ○、形が良くても位置が正しくないものは△、形も位置も正しくないものを×とした。

(表13)

休 符	○	△	×
全休符	48.8%		51.2%
四分休符	37.2%	36%	26.8%
二分休符	55.5%		44.5%
八分休符	43.9%	31.1%	25%
十六分休符	29.3%	37.8%	32.9%

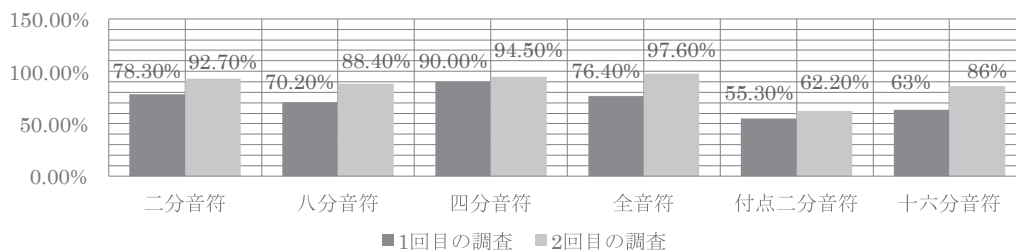
この判別は曖昧な解答も多く、全体的には音符より正解率は低いようだ。

【4】音符と休符の長さについての第2回目の調査結果（分析：古市ゆり子）

初回の調査では音（休）符の長さを塗りつぶす方法をとったが、第2回目では音（休）符を形態から名称に変更して出題し長さを➡を使って示させた。1以下の音（休）符は分数を記入させ正確な長さを示させる設問とし正しく書けていれば○、長さや分数が間違っていたら×とした。

《音符の長さについて 1回目と2回目の正解率の比較グラフ》

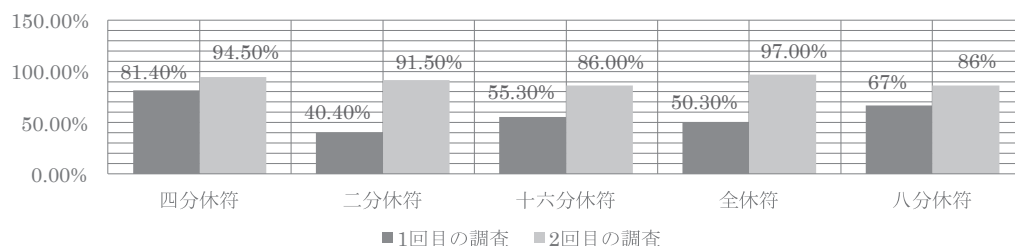
(図3)



1回目と比較して全体的に約15%正解率が上がり、授業で学習した音符の長さについての知識が身に付いてきている。しかし、付点二分音符 = 2.5、1.5、2等の記入が不正解者62名中43名で70%であった。全体的に無記入も減少したが、付点二分音符は7名おり、他の音符より多く見られた。今後、付点四分音符や付点八分音符の学習も必須である事を考えるならば、引き続き付点の正確な意味や長さについての知識を理論と実技の両方向から認識させることが重要であると考えられる。

《休符の長さについて 1回目と2回目の正解率の比較グラフ》

(図4)



1回目と比較して全体の正解率が格段に上がり、学習の成果が現れた事と共に名称での設問であった事も影響していると考えられる。八分休符と十六分休符の無記入が減少し合わせて10名であったが、正確な演奏を行う為にはこれらの休符もしっかりと身に付くよう指導していく必要がある。2回目の調査では違う音（休）符を同じ長さとして記入した回答が13/164名、8%に減少し、それぞれの長さの認識が向上している事がうかがえる。

第2回目の調査では全正解者数は95/164名で58%まで上がり、全不正解者はいなかった。しかし、数名の学生が1回目の調査で全正解だったにも拘わらず、2回目は全正解しなかった。又、音（休）符を形態から名称に変更して出題した影響も考えられるが、二分音符の長さを $\frac{1}{2}$ 、四分音符を $\frac{1}{4}$ 、八分音符を $\frac{1}{8}$ 等、単純に名称を分数化した回答もあった。今後の授業に於いてはリズムトレーニングや作曲等を取り入れて、音（休）符の長さを正確に認識する事が出来るように指導すべきである。

【5】第2回目のアンケート調査の考察について

（1）音部記号について（分析：小佐野実穂）

高音部記号、低音部記号という表記は無く、漠然とした内容ながらも、ト音記号は高い音を、ヘ音記号は低い音を表す、という回答や、ト音記号は右手、ヘ音記号は左手と回答する学生もいた。これは、音高を理解するために教科書や音楽理論書に一般的に示される一点ハ音を中心を書かれた大譜表（譜例1）の目視による回答と推察される。

（譜例1）



鍵盤楽器の習熟度が深くなれば、音部記号がすなわち右手演奏、左手演奏を表すことでないことは明白である。

音名の日本式表記¹とイタリア式表記²の相互理解により、ト音 = Sol（ソ）、ヘ音 = Fa（ファ）であることを理解し説明した学生、またはト音記号、ヘ音記号の記入の開始位置によってト音、ヘ音を表すことが書けた学生は、第2回目アンケート有効回答率の40%（160名中63名）であった。

（2）音名について（分析：北谷久美子・伊坪千恵）

初回（4月）と今回（5月）の調査を比較すると、設問の音域は限定的ではあったが、学生の「音名の理解」（読譜力）は確実に深まったと理解して良いであろう。この結果は全体授業の中での理論の学習、ピアノのレッスンの中での音を読み、弾く実践的な学習によるものが多いと思われる。「読譜力」のレベルや質は、ヘ音記号の読み方がまだ分からない、音は読めるが素早く読めない、加線付きの高音、低音あるいは和音、重音の読みが苦手、速読は出来るがブラインドタッチができず演奏が滞る、など学生によって様々である。一音一音を素早く読み取り、弾いて音に変える一連の動作によって、単なる音は生きた美しいフレーズや楽音へと変わっていく。教員は、「読譜力」について初期の段階で短期集中して身につけることを学生に自覚させ、各学生の特性をよく見極めながら、適切な指導をしていくことが重要であると考えられる。

(3) 音符（休符）の名称と長さのまとめ（分析：櫻井佐多子・古市ゆり子）

2回目の調査では名称及び長さに対する認識がかなり高まっており、これまでの授業の成果とみてよいであろう。

音（休）符の名称と長さの認識は楽譜を読む、書く、演奏する上で非常に重要である。これからの大学授業に於いては以上の調査結果を踏まえて、特に音楽経験の少ない学生に対しては音（休）符の名称と長さを関連付けて正しく認識させるよう、楽典の授業のみならず声楽や器楽の授業に於いても指導すべきであろう。楽譜を書く作業は非常に重要で、楽譜を正しく書けることが、楽譜を読むことや演奏することに対して確実な認識につながる。楽譜を書き、その楽譜を使用して演奏することは、これから幼児や児童の指導者になろうとしている学生にとっては必須である。

おわりに

第1回目のアンケート調査から、学校教育における音楽の指導、またピアノ教育等における指導の偏りが見られ、音楽の基本的知識が行き渡っていないことがわかった。そのことを踏まえ、約1ヶ月の音楽通論と鍵盤楽器の実技指導を経て、第2回目のアンケートを実施したところ、明らかに理解度が高まっていることを実証することができた。今後、理論の学習やピアノの曲が進むにしたい、「音名の理解」（読譜力）は更に深まっていくものと思われる。

本学科は、「保育園、幼稚園、小学校の現場で、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭として活躍すべき人材を育てる」学科であるので、指導している教員もこの結果を認識しなければならない。

後期の「音楽基礎」の課題は、現場で使うことのできるマーチや文部省唱歌の伴奏の練習に入る。通論においては、和音の理解、調性、さらにコードネーム奏法に入る。前期で培った分析結果を活かし、さらに積み重ねる音楽知識、及び実技の習得に対し、学生の理解度を高めるために、引き続き、教員の指導内容の検討が必要と考える。

（高牧 恵里）

註

1 ハ/ニ/ホ/ヘ/ト/イ/ロ/ハ

2 Do/Re/Mi/Fa/Sol/La/Si/Do（ドレミファソラシド）